

テスト 家庭用生ごみ処理機（屋内外用）

乾燥式 生ごみの重量が1/5に 高温バイオ式

バイオ式 室内では取り扱いによってにおい発生も

家庭から出る生ごみを電気で減量、堆肥化させる「家庭用生ごみ処理機」が発売されています。環境意識の高まりもあって、少しずつ普及しています。しかし、購入価格も比較的高く、におい、騒音、経済性などを十分チェックしたい商品です。

3方式を比較

テストした機種 現在の生ごみ処理機は大きく分けて「乾燥式」と「バイオ式」の2方式があります。乾燥式は約130℃の熱風で生ごみの水分をとばし、乾燥させる方式です。

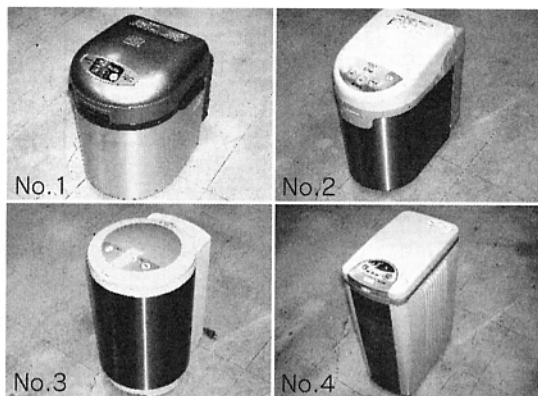
一方、バイオ式は微生物で生ごみを分解・減量する方式です。さらに、約80℃の高温でも生息する菌を利用した高温バイオ式も参入しました。

●今回は室内でも使用できる乾燥式2機種（写真No.1、2）とバイオ式（No.3）、高温バイオ式（No.4）をテストしました。購入価格はいずれも6万円台でした。

処理能力と電気代 テスト用の生ごみは、一般家庭で出るものを想定して生野菜、魚・肉類、穀類、調理加工品などでつくりました。これを3カ月間、平日は700g、土・日及び祝日はその前日に倍の1,400gを投入し、毎日、減量率を測定しました。

●No.1、No.2（乾燥式）は、減量率がほぼ80%で推移しました。3カ月間の総投入量の減量率は82%（No.1）と81%（No.2）で、電気代はNo.1が2,367円、No.2が2,764円でした。

●No.3（バイオ式）は、テスト開始直後から悪臭が発生し、毎日の減量率も60～



テストした4機種（注）週に1回1.5kg可

No.	方式	設置場所	最大処理量 1回当たり	購入金額
1	乾燥式	屋内外	2.2kg	68,800円
2	乾燥式	屋内外	2.5kg	66,800円
3	バイオ式	屋内外	700g(注)	69,800円
4	高温バイオ式	屋内外	1.2kg	64,700円

80%とバラツキが見られました。1カ月を過ぎた頃から減量率は約30%に低下し、容器内の量が増えてきたため6回ほど投入を停止、再開後も減量率は不安定でした。減量率を上げるため内蔵ヒーターやファンを多用したことから、電気代は2,538円かかりました。（注）

●No.4（高温バイオ式）は、毎日の減量率は約70%で安定的に処理できました。休日に2倍量を投入した場合の減量率は約80%になりました。3カ月間の総投入量の減量率も乾燥式と変わりませんでした。3カ月間の電気代は2,528円で、乾燥式並みにかかりました。

臭気 No.3（バイオ式）は、生ごみの投入量や内容物の種類などを調整しないと、か

なりの悪臭が発生しました。モニター試験でも「腐敗臭がきつかった」という意見が目立ちました。

- No.1、2（乾燥式）とNo.4（高温バイオ式）にはおいは良い結果でした。しかしモニター試験では、乾燥式独特のにおいを嫌う人も中にはいました。

騒音 いずれの方式も攪拌のためのモーター音と排気のためのファン回転音が若干します。乾燥式のほうが大きい傾向でした。

使い勝手 全銘柄、操作は簡単でした。

- 乾燥式は処理物がたまると、中のバスケットごと取り出せる仕組みで、処理物を取り出す手間がほとんどかかりません。高温バイオ式は前面から取り出す方式です。バイオ式は上限ラインまで処理物が増えたときに、シャベルで標準ラインまで取り出す仕組みです。

安全性 外側表面温度が80℃近くになるものもありましたが、転倒させたり、生ごみを上限ライン以上に入れて運転しても、故障や異常加熱になったものはありませんでした。

まとめと助言

- 家庭用生ごみ処理機は、乾燥式、バイオ式、高温バイオ式の3タイプがあります。乾燥式と高温バイオ式は、生ごみの投入量や種類をあまり気にせずに使えます。
- バイオ式は、他の方式に比べ、電気代はあまりかかりませんが、室内で使用する場合は生ごみの投入量や種類を調整しないと悪臭に悩まされたり、処理を促進させるためにかえって電気代が高くなる場合があります。
- 3方式とも、できた処理物を堆肥として使用するには、土と混ぜて数週間から数カ月寝かせなければなりません。そのための保管場所も考えておく必要があります。
- 乾燥式、高温バイオ式の電気代は、冷蔵庫

並みにかかります。

- 購入に補助金を出している自治体も少なくありません。購入を検討している方は、居住地の市町村窓口にお問い合わせしましょう。

(注) バイオ式は通常、攪拌だけの運転なので、他の方式より電気代は少なくてすみます。ただし、北海道では冬期間、屋外で使用すると電気代が高くなります。

200人にアンケート

家庭の生ごみ 3/4が自治体頼み

家庭の生ごみをどのように処理しているか、消費者200人に聞いてみました。

最も多かった処理方法は「自治体のごみ収集を利用」74%。ついで「コンポスター・ほかし」28%、「田畑に埋める」14%、「生ごみ処理機」6%でした（複数回答）。ダンボール箱を利用した堆肥化を実行している人も4%（7人）いました。

生ごみ処理機を使用していた12人に、使用状況を聞きました。方式は乾燥式6、バイオ式5、不明1で、これで出来た処理物はほとんどの人が堆肥として使用しており、ゴミとして出している人は1人だけでした。また、堆肥としての効果は、「効果あり」が6人、「若干ある」2人で、「効果なし」はひとりもいませんでした。

生ごみ処理機を使用していて不都合な点は「経費が高いこと」が6人で一番多く、次いで「におい」3人、「不都合はない」2人でした。

生ごみ処理機は購入費や電気代が高いことから、出来た処理物を自家菜園などで有効利用することを考えましょう。